
魔王様は苦労性

水沢 流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様は苦労性

【Nコード】

N6780Y

【作者名】

水沢 流

【あらすじ】

「魔王だってラクじゃない——」

人心を惑わす悪魔を統べる事になっちゃった、そんな魔王の物語。美貌と力を兼ね備え、いざ執務を開始してみれば問題山積み。そんな中で悩み悩み、頑張るヘタレの奮闘記。

プロローグ

深淵の主、脅威の権化。

恐怖の代名詞、病魔の担い手。

人を惑わす美貌を持ち、指先一つで災厄をもたらす――

それらを統べるとされる魔王は、その日、神妙な面持ちで水晶珠をのぞき込んでいた。

＋――＋

「納得いかんわーっ！」

髑髏の盃を握り締めた魔王の手の中で、ぐしゃりと砕けた盃から鮮血が溢れ出る。

それは阿鼻叫喚の声をBGMとする魔界の最深部、立派な城の中の事であった。

カァン！と高い音を立てた破片が、そのまま黒い焰と化して消えて行く。

その末路を見送って、床に転がった首の一つがそろりと口を開いた。

「ま、魔王様……」

怒り心頭の主を見据えて、そう声を震わせたのは「悪魔」。

手足を吹き飛ばされ、首だけになったそれが、ひどく恐縮しながら主の顔色を伺う。

この悪魔は命令に従い、一つの国に宿り、その国を滅ぼしたばかりである。

本来なら褒め言葉を賜っても良い筈なのに、主から帰って来たの

は見ての通りの暴力だったのだ。

「何か不備でも御座いましたでしょうか……」

さりげなく取れた腕で他のパーツを回収しながら、悪魔がしょんぼりと眉尻を下げる。

それを切れ長の紫の瞳でギロリと睨み、魔王は無言で水晶珠に手をかざした。

途端にふわりと浮き上がった水晶珠から、その中に映っていた景色がホールへと滑り出す。

そこには、何やら両手を上げて喜ぶ民の姿が映し出されていた。

「……見えるか」

「はい」

「これでは本末転倒ではないか！ 俺は、俺はお前なら上手くやれると……っ！」

涙目でそう喚く魔王に、悪魔が申し訳なさそうな顔をする。

景色の中で大喜びしているのは、滅ぼした国を良く思っていないかった国の民。

つまり悪魔が一つの国を滅ぼした事で、他国の民を喜ばせる事になっちゃった——と言う事なのだが、

「……すみません、ううっ……ぐすっ……」

「俺の方が泣きたいわっ！」

と、秀麗な面差しを歪め、魔王が再びの怒声を響かせる。

——魔界の民が糧とするのは、人々の恐怖や怨嗟と言う負の感情。つまる所、最大公約数で恨まれ、恐れられてなんぼなのだが——

「……戦わねばな、現実と」

深々と骨の玉座に身を沈め、両手で顔を覆って大仰に嘆く。

人の負の感情を糧とする魔族を養う身分として、魔王の気苦労は減りそうにもなかった。

十一ノ一十 酒場

魔王であるからには、絶世の美貌を備えているものである。
闇色の長い髪、伶俐な紫の瞳、白磁の如き肌。

そしてあふれんばかりの魔力は周囲の悪魔を振り向かせ、それが
権威の維持にも役立つのだが――

「……」

今はその特徴すら、魔王の悩みの種だった。

「…もう一杯」

「魔王様、飲みすぎです」

いさめるようなマスターの声が、やんわりと魔王に降り注ぐ。

それに対して片手に向け、魔王は小声で悲鳴を上げた。

「その名前で呼ばないでくれ、頼むから……！」

ボロボロのローブを頭からすっぽり被った姿で、今日は、この酒
場に飲みに来ていたのだ。

魔王の持つ魔力は芳醇にて甘美、それを打ち消すためには悪臭極
まりない聖水を香水代わりにしなければならぬのだが、そんな事
をして酒の味が楽しめるわがない。

だが飲まねばやってもいられず、こうして必死に立場を隠して来
ているのだが、それで何が解決するわけでもない。

「ですが、城に帰ればいくらでもあるでしょうに……」

「ちつとも飲んでる気がしないんだ！　こう…こうっ！」

気分の問題なんだわかるか！？と両手をわきわきさせてマスターに訴える。

「畜生、人間共め……」

魔王を悩ませるのは、いつだって人間だ。

勇者を差し向けて来たり、除霊を大々的に行ったりなど、その手段は枚挙に暇がない。

無論、それは悪魔が恐れられている事の証であって、それ自体は喜ぶべき事であった——と、今になってから思う。

なにしろここ数十年に見る人間の悪魔への評価は、それはもう目まぐるしく変わって来ていたのだから。

「魔王様」

「なぜ、人間はあんな方向に…」

「さあ、それを私に聞かれましても…」

答えなぞ出せませんよと返し、マスターが小さく息をつく。

この白髪のマスターは、現魔王にとっての数少ない理解者。

魔王が今の姿になる前、つまりただの悪魔だった頃に、良く相談に乗っていた老人だ。

燕尾服を着込み、ちゃんと伸ばした背筋で姿勢の良さを際立たせる一方、モノクルを携えた緑の目は穏やかで全く悪魔らしくない。

いつの時代だったか魔界へと紛れ込み、そのまま居ついた魔術師だと言う噂さえ、まことしやかに流されていたほどである。

「この場所で飲みたいんだ」

「こだわられますなあ」

「こだわらせろ」

「…御意」

手際良くカクテルを作り、タンブラーに注ぎながらマスターが苦笑する。

店内は人間の世界で言えば西部劇の酒場風で、蠟燭には一つ残らず青い火が灯っている。そして幻想的な陰影を作り出す青光に乗せて、妖魔の扇情的な歌声が流れていた。

魔界と言うと不協和音や耳障りな音ばかりが連想されがちだが、必ずしもそうではない。

人を魅了する旋律を作り出す意味でも、芸術面にはかなりの力が入っていた。

特にゴシック系音楽に関しては常に人間界でそれなりのシェアを誇り、それが、魔界で譜面を綴る悪魔達の自慢の種でもあった。

「そりゃあ、俺だって憧れてたさ」

夕暮れ色を上には浮かせ、闇夜の藍色を下に沈ませるオーロラめいたカクテルをマスターから受け取り、物憂げな視線をそこに注ぐ。

水晶の器に映る美貌の青年は紛れも無く自分で、その顔が先代魔王の若かりし頃に良く似ているなと魔王は思った。

「懂れてたんだが、なあ……」

過去、城のバルコニーに立つ先代魔王を見た後、興奮気味にこの酒場に駆け込んだのが懐かしい。

なにしろ城下に押し寄せる悪魔のせいで、当時の魔王は米粒以下の大きさでしか見え無かったと言うのに、まるで往年の恋人にでも会ったかのように胸が高鳴ったのだから。

翼をしまう事すら忘れて、ここに駆け込むや否やマスターに渋い顔をされたものだ。

——その時は確かに懂れだった。

当時見た魔王は恐ろしくも魅力的な、自分にとっても崇拜の対象だった。

「一曲もらうぞ」

「無論、喜んで」

グラスを磨きながら応じてくれたマスターにひらりと手を振り、ふらりと立ち上がって骨組みのジュークボックスに歩みよる。

そして魔王が曲を選ぶと、鋭い血色の針がレコードに触れ、短調のクラシックが流れ出した。

その事に気付いた歌姫が音楽に合わせて歌を変える。闇色のドレスを纏い、高いヒールの靴を履くその歌姫の服は、かなり際どいラインで切り取られていた。

薔薇色の唇からこぼれだす声の甘さ、しつとりと濡れた花のような歌声。王宮にいる歌姫に比べれば技術につたなさはあるものの、人間だったら一発で心を射抜かれる声である。

死を歌い、背徳を歌い、魅惑の声を流し続ける情婦のような歌姫。
その姿をそっと視界に納めて、魔王は小声でつぶやいた。

「――また、悪魔に戻れたらなあ……」

タンブラーに注がれた酒は、望みに応じて味が変わると言う。
やや苦く感じたそれに自分の心情を見出して、魔王はそっと、フ
ードを引いて深く顔を隠した。

十一ノ二十 路地

——人間なくして魔性なし。

人の負の感情から生まれる悪魔は、人々に囁きかける事で、何世紀にも渡ってその存在を維持して来た。

すなわち、悪魔と信じられた概念が力を持って悪魔になるのである。

それを統べる魔王は地域により雰囲気が異なれど、だいたい人間の理想とするすべてを兼ね備えた存在であるとされ、実際、それに近い形状を保って来た。

その——はずだった。

「ありえん……」

よろよろと裏路地を歩きながら、魔王はげんなりした顔で額に手を当てていた。

扉の向こうから聞こえて来るのは、底抜けに明るい声。しかも幼女の。

舌ったらずの甘えるような声は大して響くものでもなかったが、魔王の聴力をもってすれば、嫌でも耳に届いてしまう。

「だからあ、ちょっとおでかけして来るのですう☆」

「……」

人間の想像力が形となったのが悪魔。

つまり、どっかの国で夢見られちゃってる萌え悪魔とかも、時に

は本当に存在してしまうのである。

そして、魔王たるもの、どんなに不満があろうと悪魔達を養わなければならない。

その大元は、例え悪魔がロリであろうとラーメン好きであろうと、根本的に人の負の感情そのものに他ならないのだ。

いわゆるサキュバスやインキュバスも、虜にした人間が墮落していくのを見て嘆く親兄弟がいてこそなのである。

そうでなければ、墮落させる甲斐すらない——勝手に一人で盛り上がっているのを横目に眺めていれば済む話なのだから。

「…どうしてこうなった」

生血なんて言う当たり前のものが、悪魔の好物とは限らなくなつて久しい。

つまり悪魔達が魔界に滞在している時のため、負の感情からラーメンを作る技術だの、スイーツを作る技術だのを魔力で編み出し、好き嫌いの多い悪魔達に食わせるのもまた、魔の統括者たる魔王の務めであつた。

「部下をどうにか、減らせんものだろうか…」

頭を飛ばそうが木っ端微塵にしようが、魔界での悪魔はすぐに再生する。

仮に完膚なきまでに粉碎したとて、人間が存在を望めば再誕する。そう考えると、人口的な問題から糧の種類を変えたい所だが、悪魔Ⅱ恐怖の図式は、人間との間で長年に渡って築いて来た伝統である。

ゆえに、そう易々と世界のルールが変わるわけもなかった。そもそも、たかだか数世代の間に人間の概念がこうも変わるとは、

魔王とて思ってもいなかったのである。

——主に、どこかの島国とか。

「というか、せわしないのだ！ 人間が！」

たった百年も経たぬうちに新ジャンルとか、ちよつとは落ち着けないのか人間達よ。

そう裏路地をよろつきながら悪態をつく姿は、どう見てもただの酔っぱらいでしかない。

ほんの百年前ぐらいまでは、いかに人間を惑わすかの書を片手間に読んでいれば良かったのに——今となつては人間界から雑誌を取り寄せ、必死になつて恐怖のトレンドを追う始末である。

「ああもう、一切合切滅ぼしてくれようか……」

けれども、それをやったら待つのは地獄の食糧難。

そう考えるとますます気分が滅入つて、魔王は路地にへたり込んだ。

「ちよつとこう、どかーんと人間全部壊滅させられればな……」

ハルマゲドンとか起こしてな。

そんな文句を言いつつたそがれる美形を、街灯の紫の光がひそやかに照らす。

そこに、ひょいと一つの影が舞い降りた。

「……」

黒猫。

不吉の象徴とされた、比較的歴史のある弱小悪魔である。

みー、と鳴きながらすりよるその姿のかわいらしさに、ふと、魔王の宝石のような瞳が柔らかくなごんだ。

「ずるいな、貴様らは気楽で……」

ごろごろと喉を鳴らす猫を指先でかまいながら、ぽつりと本音をこぼす。

柔らかな毛並みで指先をくすぐる猫は、みいみいと甘えた声で鳴くばかり。

化ける気になれば、魔王がこうした子猫になる事とて造作もないが、おそらく桁違いの魔力で一発看破されるのが関の山。

「……忸ならんな」

俺の自由はいずこ。

そう、ため息をついて膝を抱えようとした時、ふわりとローブの影から魔力がこぼれ出した。

先に浴びた聖水の効果が切れたか、魔力は路地中の魔獣を振り向かせる勢いで流れて行く。

——しまった、と思った時にはもう遅い。

「ちよ、貴様ら待てっ。頼むからこっちに来るな——」

にゃーにゃー、ギャイギャイ、ガウガウ。

鳴き声のオーケストラと共に、魔王の姿が魔獣の群れに埋もれて

行く。

魔獣にとって、魔王の魔力は猫にまたたび並みの魅力を持つもの。路地に流れ込む濁流のように、天から、そして地から集まって来る魔獣の軍勢――

「……」

魔王を核としたこんもりとした毛玉のかたまりができるまで、そう多くの時間もかからなかった。

我先にと魔王に甘えようとする獣達が、もふもふわさわさとひしめき合う。

その内側で、魔王はくぐもった声をあげながらもがいていた。

窒息死する事はないが、感傷に浸っていた気分が台無しだ、と。

怒りに任せて握りしめた手の中に、強大な魔力が凝縮して行く――

「……どけ」

怒りに震えるその声は、並みの悪魔を平伏させる鋭さを持っているが、歓喜に酔っている魔獣相手ではゴマ粒ほどの効果もない。

「どけって――言ってるんだアアア！」

激怒。毛玉の中心で吠えた魔王から、一気に力がふくれ上がる。

直後、路地裏から天に向けて突き抜けた雷光が、上空の厚い雲を消し飛ばして一時的な星空をのぞかせた。

十一ノ三十 庭園

「…と言う事があったのだ、青薔薇」

「そうでしたか。流石、魔王様の無能っぷりが知れますね」

そう、さらっと暴言を吐いた美貌の少年に、魔王が不満そうな顔をする。

彼——青薔薇は、この城の中庭に長い事囚われ続けている悪魔だ。極寒の枯れ薔薇めいた銀茶の短髪、咲き誇る花と同じサファイア色の瞳。

その身を包む白いローブには、絡み合う茨のデザインが施されている。

「貴様は、本当に言いたい放題言ってくれるな」

「ええ、魔王様のご機嫌をうかがうなんて、さらさら御免ですから」
シャラリと茨の飾りがついたローブを揺らし、秀麗な顔を皮肉気に歪めた青薔薇が笑う。

噂では先代魔王に楯突き、ここに幽閉されたのだと言う。実際、代替わりした後も魔王に対する憎まれ口は留まる事を知らず、城の者ほぼ全員から嫌悪の視線を向けられている。

魔王と青薔薇が腰かけているのは、水晶で出来た茶会用のテーブルセット。

花が絡まる鳥籠めいたトレリスの下、互いに向かい合う形で行っているのはチェスだった。

「ところで、僕をそろそろ出す気はありませんかね」

「貴様のような身勝手を出す程、俺は無能ではないぞ」

そう笑いながら椅子に背を凭れた魔王に、青薔薇がひよいと肩を竦める。

それから、すいと半透明の指でチェスの駒を進め、魔王に次を促した。

庭園の彼処に置かれた噴水の音色が、涼しげな雰囲気をも二人に伝えている。

その合間を縫うように、硝子の水琴に触れた水滴が、脆く透き通った高音を響かせていた。

「出していただけないとは、まことに残念です」

「一生、残念がってればいい」

と、自分の駒を進めた魔王が不遜に笑う。

城の者は当然と言えば当然なのだが、魔王が何を言っても賛同しない。

それが、持ち売る魔力の魅了効果のせいである事も、魔王の側近でありたいという権力欲のせいである事も知っている。

だから、否定されるのを好むわけではないが、裏表無く言いたい事を言い合える青薔薇の元に何となく訪れてしまうのだ。

口を開けば、嫌味しか返って来ないと知っているのに。

「だいたい、人間の軸がぶれ過ぎなのだ。堕落させようにも堕落を容認する寛大さを持ち、あまつさえ規律を緩めようと余計な世話まで焼いてくれる」

「それも善意なのでは？」

「迷惑な善意だ！ 神の嫌味なのかと思うと眉間の皺が増える心地だぞ！」

神の示す規律は厳しければ厳しいほど良い。

そうであってこそ、反抗心が生まれ、悪魔にも活躍の場が出来ると言うものだ。

背徳と言うのは徳あってこそその世界なのであって、過去に忌まれたような事柄が容認されると言う状況は実に理解し難く、また、度し難い。

同時に、そうした物事に一切合財触れさせないと言う人間が増えて来た事もまた、魔王を日々悩ませる事となっていた。

「これは悪い事であり許されるべきではない、と厳格に定め、そこから離れる事に並々ならぬ切望が絡むぐらいに縛り上げてこそ、背徳の願いに力も籠ると言うのに。好き放題に天に唾を吐く事が許容され、あまつさえ背徳を娯楽の一貫として認めるとは！ 人の正気を疑いたくもなるわ！」

「神に抗議されては？」

「貴様は、この俺に天光に焼かれに行けとでも言うのか？」

死にはしないだろうが、のこのこ天界に出かけて行ったとあっては只の笑い話になるだけだ。

渋い顔で青薔薇を睨み、血の満たされたグラスを煽る。

「魔王様」

「何だ」

「チェックメイトです」

「……」

どこまでも静かな庭園で――

その後、青い花卉が暴風に吹き散らされたのは言う間でもない。

十一ノ四十 報告

魔王の気だるげな眼差しが、窓の外へと注がれる。

その憂いを帯びた視線を追って、女従者が平坦な声で先を促した。

「魔王様、手が止まっておられます」

「わかつている」

何も、物思いに耽って外を見ていたのではない。

目の前の書類からどうやって視線を反らすか考えた結果、見る先が窓しか無かったただけだ。

しぶしぶ窓から視線を反らし、曲がった六本針を持つ真鍮製の柱時計を流し見て、どっさりと積まれた書類へと視線を移す。

そこにある、きっちりと端を揃えられた書類達は無言で、早く片付けろと魔王に催促しているようだった。

「……」

長い蜥蜴のような尾と瞳を持った従者が、まさに爬虫類独特の無機質なまなざしで魔王を見ている。

この従者、ついつい職務放棄したくなる自分を叱咤する為に魔王が作り上げたもののだが、やはり作るべきでは無かったかと、早くも挫折気味だった。

「…上手く行かな」

ぼやき、血文字で綴られた契約文のチェックを一枚こなし、手に持ってゆらりとひらめかせる。

途端に輪郭を崩した契約書が、黒い羽虫の如く霧散した。

——これでめでたく契約完了。

これから、誰かが正式に魂を悪魔に奪われる事になるだろう。

魔王が最終チェックをしなければならないのは、不要な契約により貴重な食料庫である人間界が滅びないようにする為だ。

部下の責任は上司の責任である。

全く以って世知辛い。

「一万人ぐらい生き残っても、別に問題はないと思うのだが？」

紫水晶の幻想的なペンスタンドにペンを置き、半ば独り言のように従者へ問い掛ける。

壁の松明の光に鱗の多い肌を照らされた従者が、それに対して恭しく頭を垂れた。

「魔王様……手が止まっておられます」

「……」

まさに独り言にしかならなかった。

近年の人口増加は、この魔王の怠慢にもよる。

蛇の化身たちが人間に知恵を与えた代償に魂を奪うのがルールなのだが、いかんせん許可が追いついていないのだ。

結果として知恵を与えた先の人間が寿命を全うしてしまうまでに許可が終わらず、蛇達の苦勞が徒勞に終わっているわけである。

お陰で蛇が三回働いて一回魂にありつければ上々と言うワーキン

グプア。

サービス残業も何のそのだ。
残業代はそもそも無いが。

そんな状態であるがゆえ、人間達の知識インフラが留まらず、文明の加速もフルスロットル。
それが悪魔への真摯な恐怖を薄れさせるに至り、この有様となっているわけである。

これが魔王と言う絶対的な魅力の持ち主でなければ、部下のストライキまたは大謀反も確実と言える状況だった。

「魔王様」

「何だ、手は止めてないぞ？」

「いえ、東の塔に侵入者が、」

ガタンッ！

「…侵入者が、訪れたと」

勢い良く立ち上がった魔王に驚いて言葉を切った従者が、律儀に残りを言い終える。

その頃には、床に落ちた書類を拾いもせず、豊かなローブを翻した魔王が大窓を開け放っていた。

「魔王様、手が――」

「安心しろ、これから動かしに行く！」

従者が止める場もあらばこそ。

嬉々とした表情の魔王が六翼の怪鳥に変じ、窓より舞い上がって夜を駆けた。

十一ノ五十一 珍入者

塔の空気は異様だった。

強面の悪魔がずらりと並ぶその光景のせいもあっただろう。

けれども、それを凌いで場の雰囲気が悪くしていたのは――他でもない、侵入者自身であった。

「君が魔王？」

息も絶え絶えなまでに傷を負った、大振りのローブを羽織った青年。

どう見ても痛めつけられたとしか思えないのに、その顔に浮かぶのは歓喜。

それを見た瞬間、魔王の嫌な予感が的中した。

「…俺は、人間のそう言う所が解せんのだ！」

思わず後ろに下がる魔王に、侵入者が縋るようなまなざしを向ける。

そこに潜む願いを読み取って、魔王はさらに一步下がった。

人間界で言う所のドン引きである。

痛めつけ甲斐が無いと言うか、そもそも喜ばれてしまったては悪魔として立つ瀬が無いというか――おろおろと視線を彷徨わせる牛頭の悪魔に一睨みをくれて、恍惚に蕩けた顔をしている人間を斜に見下ろす。

「人間界で、貴様のような輩を何と言うか知っているか？」

「知ってますよ、変態でしょう？」

満面の笑顔でそう断言された瞬間、文字通り部屋の空気が凍った。主に魔王のせいである。

「生憎だが、貴様の願いをかなえてやる気はない！」

叶うならさっさと消してしまいたい所なのだが、この歓喜のオーラは毒々し過ぎる。

下手に首を落とすものなら、無類の愉悦にて塔が穢されそうだ。それに何より、

「貴様を食う悪魔が哀れだ」

悪魔が誰かの願いをかなえる時とは、紛れもなく魂を奪う時だ。つまりこの変態の願いを叶えた悪魔は、こやつ之魂を奪わなければならないのである。

適した候補は数人思い当たるが、万人に喜ばれる死と言うのは悪魔にとって拷問に等しい。

大抵、一人か二人、その死を嘆く者がいてこそなのだが、牛頭に聞く限り、親族郎党からもこの青年は見捨てられていると言う。

「…最悪だ」

人間界にて、ほぼ全員から疎まれるような悪人に悪魔が手を出せないのも、その辺りに要因がある。

誰かが連鎖的に嘆かねばならないのだ。

例えば悪魔と契約した人間が、殺人鬼を呪い殺した後、自身も呪われて激しく後悔したりしてこそ悪魔も働き甲斐があると言うもの。

だからと言って、悪人の滅殺を神の側がかなえる事はない。

慈悲を説く神にとって、殺人と言う願いを叶える事は禁忌に当たるのだから。

罪を裁くと言う権利と、その死を望む人の願いを叶えてはいけないと言う義務。

神の名の元に殺人が許されたのも神魔にしてみればごく最近の事であるゆえ、そりゃあ神頼みの戦争で敗戦だって起こる。

さぞや先方も頭を悩ませているだろうなと思った時点で、ふと、魔王の表情に苦笑が浮かんだ。

「頼むからもう黙れ」

拝啓、先代魔王殿。

俺は今日、とんでもないものを拾ってしまったようです…。

聞けばどうやら、彼の先代は高名な霊媒師であるらしい。

よって生まれついて高い力を有し、幼少の頃から悪魔達と会話もできたのだと言う。

時代が時代なら立派に邪教の教祖あたりになれただろうが、いかんせん性癖が性癖である。

私を黽つてと迫り来る男を教祖にしようと言う輩もそうそう居ない。

…そりゃ、ドン引かれようと言うものだ。

仮に同じ趣味を持った者が集った所で、性癖の需要と供給が釣り合わない。よってアウト。

「魔王様、如何致しましょう…」

こいつ、と青年を視線で示した牛頭がうなだれる。

その情けない姿に溜息をついて、魔王は苦渋の決断を口にした。

「仕方が無い、送り返す方法が見つかるまで俺が預かる」

十一ノ六十 相談

「青薔薇、貴様に配下をやろうと思うのだが」

「お断りします」

「…まだ何も言っていないぞ」

「魔王様のご好意である時点で、お断りです」

断る理由はそっちなのか、と唸る魔王と、額を付き合わせるようにして微笑む青薔薇。

笑顔同士で睨み合う二人を中心に、感化された青薔薇の茨がウネウネと不思議な踊りを踊っている。

「どう言えば貴様を納得させられるのだろうか」

「どうすれば諦めて下さいますかね」

配下なぞ不要と再三申し上げたでしよと断固拒否の姿勢を示す青薔薇に、魔王が渋い顔をする。

この調子では、庭園にあの人間を放り込んでも、さっさと追い出してしまおうだろう。

「…貴様の頑固さには呆れ果てる」

「ええ、そうでなければこんな場所に幽閉されておりません」

先日、あれだけ盛大に散らされた庭園も、流石は魔界、綺麗に元

通りになっている。

やがて、恒例の悪態合戦が終わった事を察した噴水中の女水魔が、つまらなそうにあくびをして透明な足を組みなおした。

「大体、それが人間なら利用なされば良いじゃないですか」

と、蒼月の光を浴びながら口を開いたのは青薔薇。

それに露骨に嫌そうな顔をする魔王に、青薔薇が涼しい顔で畳み掛ける。

「だいたい、魔王様は考えが古過ぎるのです。そんな調子だから、時代に置いていかれるのですよ」

「庭から一步も出た事の無い引き箒もりに、遅れを指摘されるとは心外だ」

「引き箒もりなめないで下さい。移動に費やす時間を全て、覗きと分析に費やしてるんです」

伊達に人間界覗きが趣味じゃありませんよと、そう笑う青薔薇の態度はふてぶてしい。

それがまた実に悪魔的でもあるのだが、その背德的な美しさに惹かれる存在は残念ながらこの場にはいなかった。

「人間界の事は人間に聞くのが一番ですよ。大丈夫、彼は良く知っています」

「…見てたのだな、奴が来る前を」

「ええ、噴水から。あ、早くお戻りになった方が良いでしょうよ魔王様、

件の人質が鉄の処女のある部屋に入ったようですから」

「何だと!？」

予想外の凶報に、顔色を変えた魔王が黒炎に姿を転じて消える。

その数秒後――魔王が慌てて人質をどつき飛ばす姿が、噴水の
つに映り込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6780y/>

魔王様は苦労性

2011年12月27日23時48分発行